

この人はメシアか

ヨハネによる福音書 7 章 25 節-31 節

賈 晶淳

トランプ氏の二度目の政権が始まりました。トランプ氏の登場以降アメリカは民主党・共和党両陣営が極端に対立するようになり、特にトランプ氏の政策と姿勢は世界の人々に憂慮と不安を与えています。支持者らは保守右翼を標榜し、トランプ氏は自国中心主義的政策を連日世界へ向けて発信しています。このような人物がどうしてこの 21 世紀にアメリカのような国に現れたのでしょうか。

イエスの時代、ユダヤ人にとってイエスはどう見えたのでしょうか。ローマが支配していた社会は分裂と混乱が続き、人々は危機感の中でメシアを待望する生活を送っていました。メシアは古代ユダヤ人にとって大変重大なテーマであったと考えられます。その一つの要因は、まともな指導者がいなかったということでしょう。エルサレムには外国の軍隊が駐屯し、神殿を管理する祭司集団がいて、サンヘドリンという議会がありました。この議会ではサドカイ派という一般貴族の集団とファリサイ派という宗教貴族の集団が対立していました。そして、多くの民衆は政治・宗教の両面から虐げられ搾取されている存在でした。そのため民衆の方がメシアへの期待が強かったと思います。むしろ宗教的というより社会・経済的な理由が強かったとも言えるでしょう。

トランプ氏の政策にはほぼ、自国から経済的流出を防ぐためのものが多く見られます。それはアメリカが貧しくなったということでしょうか。また、キリスト教の保守派を背景に前の世紀の宗教倫理へ回帰する姿勢を見せています。例えば、白人優越主義や性的志向及び性自認(SOGI)を抑圧する政策のことです。それはアメリカが自由主義国家であるという立場を諦めるということでしょうか。

今回の大統領選でトランプ氏が一部の人にはメシアとして見えたのでしょうか。或いは自らメシアを名乗ったのでしょうか。イエスは「偽預言者を警戒しなさい(マタイ 7 の 15 他)」と注意していました。メシアは目の前の苦しい現実から抜け出すための存在ではありません。自らの病気を癒すことは現代の医学でも十分可能です。メシアが国家主義者や民族主義者だとは聞いたこともありません。古代のユダヤ人の中には、メシアを待ちくたびれて強盗団のような組織に加担した人もいました。

今回のトランプ支持者の中には過去の栄華を取り戻し、自分のプライド(白人やキリスト教)を守ってくれと思っている人もいます。

聖書の本文ヨハネ 7 章 27 節にメシアの出身地が問題になっています。

わたしたちは、この人がどこ出身かを知っている。

本文には入っていませんが、続く 7 章 41 節と 42 節にも出ています。

「この人はメシアだ」と言う者がいたが、このように言う者もいた。「メシアはガリラヤから出るだろうか。メシアはダビデの子孫で、ダビデのいた村ベツレヘムから出ると、聖書に書いてあるではないか。」

メシアの出身地が問題となっていて、その出自と血筋が特定の場所や人だと思っていたことが、当時の宗教や政治の中心といわれているエルサレムの人々の考え方であることはよくわかります。要するにエルサレムの隣りの町であり、ダビデの血筋と出身地であるベツレヘムの生まれでなければならぬという考えです。イエスが地方のガリラヤの出身であるため敬遠することは、特定の地方出身者を差別する現代人もいますので理解できますが、だからといって出身地まで変える必要があったのでしょうか。ユダヤ人キリスト者が多かったマタイの教会ではその必要があったでしょう。マタイのイエス誕生の物語はガリラヤに住んでいた臨月のマリアと婚約者ヨセフをはるばる遠いベツレヘムに移動させます。それはどう見ても後からつけられた出生地証明の話です。それにダビデから始まる系図まで作っ

ています。ルカの場合はマタイの豪華版誕生物語についていけなかったのか、ダビデではなくイエスから始まる系図の話と、三人の博士ではなく羊飼いの話に入れ替えています。マルコはそもそも誕生物語すら載せていません。イエスはあくまでもガリラヤの人で、民衆の同伴者であったことを記しています。ヨハネには誕生物語がもとからなく、本文にあるようにメシアの出自や血筋がどうしたという考え方です。

今回のトランプ氏が廃止する政策の一つで、これまでアメリカが人口を増やすために取って来た出生地主義があります。一部の選ばれた他国の人がマリアのように臨月の重い体でアメリカに移動し、そこで出産するとアメリカ市民権を与える制度です。イエスの誕生物語はまるでこの出生地主義の古代版のようなものです。

出身地や学歴などある基準を作り、他人を区別するのは一般的に多くあることです。それらは差別や排除の原因にもなり兼ねません。最も良いのは基準を設けなくてそのまま認めることです。例えば、イエスがガリラヤ出身であることをそのまま認めることです。勿論、それは簡単なことでないことは分かっています。ヨハネには群衆のメシア基準が出ています。31 節です。

群衆の中にはイエスを信じる者が大勢いて、「メシアが来られても、この人よりも多くのしるしをなさるだろうか」と言った。

しるしとはイエスが行った奇跡でそれがメシアの基準と思っている人のことです。また別の基準もあります。27 節です。

わたしたちは、この人がどこの出身かを知っている。メシアが来られるときは、どこから来られるのか、だれも知らないはずだ。

メシアはどこから来るのか誰も知らないという基準です。それはイエスの出身地が分かっていたらメシアではないということになります。28 節以下にこれらの議論についてイエスの答えがあります。すると、神殿の境内で教えていたイエスは、大声で言われた。「あなたたちはわたしのことを知っており、また、どこの出身かも知っている。わたしは自分勝手に来たのではない。わたしをお遣わしになった方は真実であるが、あなたたちはその方を知らない。」

いろいろと基準を決めメシアを判断しようとするが、要は誰に遣わされたのかが大事であるという話です。

世界でポピュリズムが流行っていますが、それはいわゆる大衆先導主義、大衆迎合主義など、大衆を見下すことで可能な政治のことです。反知性主義とも言っています。エルサレムのエリートたちがイエスを殺したのは、イエスが恐ろしく、放っておけない存在だったからです。彼らにはイエスがメシアだという確信まではなかったが、本物のように見えたのでしょう。だからイエスに死をと群衆に叫ばせたのです。ポピュリストとは相手がメシアであっても自分のために殺せる人です。それは、彼らがメシアを殺したと思う瞬間にメシアは誕生するという逆説が分からない反知性主義者だから可能なのです。

21 世紀に入り世界はそれまでの価値観や方向性を失い、混乱へ向かっている状況です。イエス当時も自分勝手にメシアを名乗る人は大勢いましたが、今もポピュリズム的偽メシアがブームになり、世界を動かそうとしています。メシアは誰に遣わされているのかという問いかけが極めて重要となる時代です。

(2025 年 2 月 2 日証詞より)